

編集後記

「國文學試論」第三二号をお届けいたします。相も変わらず新型コロナウイルスに翻弄された二〇二一年でしたが、国文学研究室の伝統である『試論』を受け継ぎ、無事に刊行まで漕ぎつけたこと、ひとまず安堵しています。

感染が確認され始めた二〇二〇年よりも、活動自粛の動きが緩和され始め、通勤通学が活発になると同時に、ファイザーやモデルナといったワクチン接種も積極的になった一年となりました。

二〇二一年一〇月には、「緊急事態宣言」発令による国民全体の自粛のおかげもあって、一日の感染者数が一〇〇〇人を下回ったこともありました。年が明け再び増加の一途を辿っています。

私の勤務する私立高校でも、昨年度から修学旅行をはじめとしたさまざまな行事が中止となり、運よく開催できたとしても活動を制限せざるを得ない状況です。コロナの影響による弊害は教育現場でも少しずつ表れています。

わかりやすかったのは、京都を舞台とした古典作品の説明に、「みんなは修学旅行で京都に行ったことがある人が多いと思います。」という導入フレーズが通じなくなったことです。私の母校では、中学校も高校も必ず京都、奈良に行くことが定番となっており、教材の中で行ったことのある地名を見て、旅を思い出したものでした。

しかし、その「定番行事」が軒並み中止となっている今、生徒たちは授業の外で学習し、青春する機会が奪われると同時に、教員側もまた今までの「常識」が通じなくなっているのです。どれだけ教材や経験が、多くの行事によって支えられていたのか、ということ改めて実感しました。

「見えない相手」と戦いながら歩むことは、終わりの見えない競争

争のようで、苦しく、時にはすべてを投げ出したくもなります。そのような状況下でも、研究者として情報に惑わされず、できることを常に考え、備えられる人間でありたいです。

また、今年度の九月には博士前期課程一名(山宮)が修了しました。厳しい状況下の中で二人の院生も世に論文を出す、という大学院生としての第一歩を踏み出したことも喜ばしいです。願わくば『國文學試論』が今後も平穩無事に、継続して刊行できますように。最後になりますが、今号の刊行に際してイレギュラーなハプニングが多々あったことと思います。それでも諦めずに厳しく温かくご指導いただきました先生方、ご支援くださった大学職員の方々、印刷会社の方々に心より厚く御礼申し上げます。(山宮)

国文学試論〈第三十一号〉

二〇二二年三月一〇日 印刷

二〇二二年三月一七日 発行

編集兼
発行所

東京都豊島区西巢鴨三二〇一一

大正大学大学院文学研究科

国文学研究室 内

印刷所

東京都豊島区東池袋五―四九―六

株式会社 白峰社

電話 〇三(三九八三)二三二二番